

「さて、もう家に帰るわ。そろそろ、あの子が来るからね」

「深山さん、めっっちゃ笑顔ですね……」

「ふふ。あの子は私の生き甲斐なもの」

「私もですっ!! 今日には沢山ハグしちゃいます!!」

「二人とも大胆ですね。でも、やっぱキスが一番ですよ♥」

「えっ、キスしたの!?!」

「昨日で三回目になります。え、でも結構みんなやってますよ?」

「し、知らなかったわ。わ、私もしたい……とにかく、また明日に!」

「は〜い♪」

とある住宅地にて、大勢の人妻から注目されている少年がいた。

少年の名前を翔太という。家族の居ない身である翔太は、施設で暮らしながら、生活費を稼ぐ為に毎日とバイトに勤しんでいる。自転車の荷台に牛乳を積んで団地を直走る少年の姿は、もはや近所において馴染みの深い光景だ。

愛らしい容姿と健気な様子が母性本能を激しく攪るのだろう。最初こそ頭を撫でる程度がせいぜいだったスキンシップも、近頃はエスカレーターが止まらないらしく、過度なセクハラが横行していた。

目次

220	181	134	92	37	04
— エピローグ	— ハーレムパーティー後編	— ハーレムパーティー前編	— 姦淫地帯	— いびつな痴女	— 会長の誘惑♥

第一話 会長の誘惑
♥

身寄りのない翔太は、とにかく日々の苦勞が絶えなかった。

まず金銭的な問題が押し掛かる。施設から毎月お小遣いが支給されるも、それで生活が成り立つものではない。自分の為にも、翔太は子供ながらに働き詰めだった。

授業が終わると、そのまま仕事場へと赴き、配達の業務に勤しむ毎日だ。配達の範囲が広い上に、牛乳を運ぶ労力も相当である。けれど、翔太が思い悩む本当の問題は、そんなことではなかった。

「あうう、次は深山さんの家か……」

今日も例外なく配達業に忙しない。使い慣れた自転車で団地を駆け回り、次々と牛乳を投函していく。牛乳の重さに四苦八苦していた初めの頃とは、比較にならないスピードだ。

しかし、次の配達先を確認するや、途端に翔太が間緩くなる。面映ゆい表情を浮かべて一人で勝手に頬を染めていた。

「よし、今日こそ牛乳を渡したら、すぐに立ち去ろうっ」

やがて到着した先は、表札に深山みやまと書かれた家である。此処の主婦こと深山由紀ゆきが翔太は苦手なのだ。由紀は地域の自治会やPTA会長を務める人格者として知られているが、ある一点で問題を抱えていた。

ピンポーン♪

「翔太くううん!! 待ってたわああんっ!!」

「うわあっ!?!」

牛乳を手に、インターフォンを押す。直後に、まるで玄関で待ち構えていたように、その人物が満面の笑みで飛び出して来る。ご多分に漏れずに、即座に由紀は、内玄関へと翔太を引き摺り込んだ。

そして、愛の抱擁を交わす。一回り、二回り小さい翔太を力いっぱい抱き締めて悦に浸る。知的クールで知られる由紀の、普段とは懸け離れた蕩けた表情が其処に在った。

由紀は大のシヨタコンであり、特に翔太を髓まで溺愛していた。

「あくん、翔太君、翔太君、翔太君っ♥」

「ああぐっ、深山さんっ……く、苦しいです……あ、あうう」

「翔太君、翔太君っ、今日も可愛すぎよおっ。好き、好き、好きいつ!!」

「ううううっ……」

この頃は、ずつとこんな調子である。翔太と同級の娘を抱えた人妻にも拘わらず、狂ったように愛慕を叫んで止まない。女性に対する免疫が弱い翔太は、こういった由紀の過剰なスキンシップに頭を抱えていた。

「ふふっ。翔太君ってば、今日も顔が真っ赤よ。もおくそろそろ慣れても良いんじゃないかしら？ まあ、照れてる翔太君も大好きなんだけどもっ。はあ、はあ、はあっ……」

人妻らしく熟した由紀の身体に、翔太が見る見ると沈んでいく。巨乳で窒息させる勢いのハグである。否応なしに性を感じてしまい、いつも通り翔太は赤面してのパニックだった。

由紀は、そんな初々しい反応が堪らなく好きなのだ。

「あ、あの……深山さん。そ、そろそろ……」

「苗字で呼ばないで。何回も言ってるでしょう。由紀って呼ぶまで絶対に離さないわよ？ ほら、名前で呼んでごらんならい？」

「あ、うう……ゆ、由紀さん……放してください……」

「ああああ、翔太君に名前と呼ばれて……ああ、これだけで、もうっ!!」

「ゆ、由紀さん？ は、放してっ……」

「あああつ、ま、また呼んだっ。んっ、んんんんっ!!」

由紀も負けず劣らず顔が赤い。顔だけに留まらず、全身が火照っている。翔太を抱擁しながら、タイトスカートの奥底を濡らしているのだ。そこで名前を呼ばれると、それだけで由紀は軽く達していた。

由紀の拘束が緩み、翔太が慌てて抜け出る。距離を取って牛乳を手渡す。まだ性を深く知らぬも、巨乳に圧迫されて芽生える反応が如何なるものか本能的に理解している。さり気なく隠した下半身について言及される前に立ち去ろうと踵を返した。

「えつと……それじゃあ、牛乳は渡したので……」

「あ、待って翔太君。そんなに急いで行く必要もないじゃない。その……少しだけウチでお茶していかない？ その、牛乳のお礼ということ!!」

「お、お誘いは嬉しいんですが、まだ配達が残ってるので」

「少しくらい良いじゃない。怒られるのが怖いのか？ 大丈夫よ。その時は、私の所為にして良いから。自治会のトップだもの、いくらだって擁護してあげるわよ♪」

「い、あ……で、でも……」

「ほら、中を案内してあげるわ」

「う、は、はい……」

と言い、由紀が半ば無理やり翔太の手を引っ張る。諦めたように翔太が肩を落とす。翔太が抵抗を見せるのも最初だけであり、もう一押しすれば簡単に堕ちることを、地域の若妻なら誰でも知っていた。

「それにしても、ホントに広くて綺麗なお家ですね。由紀さん、ホントにお金持ちなんですね。スゴイです。僕も、こんなウチに住んでみたいな」

連行される中で翔太が感想を漏らす。由紀の夫は、結構な実業家であり、住宅も相応の水準を誇っている。こういった環境に縁のない翔太が素直に圧倒されるのも無理はない。だが、愛すべき翔太に感嘆されても、由紀の表情は複雑そうだった。

「……スゴイのは夫よ。私は、ただの気儘な専業主婦だから……」

「でも、お金持ちって羨ましいです」

「家が裕福だからって、必ずしも幸せとは限らないわ」

「そうなんですか？」

「娘と過ごす毎日は幸せだけど、夫のことを考える度に、ちよつとね……あああ、せつかく翔太君が来てるのに、こんなことを愚痴っちゃうなんて、私ったら馬鹿っ!!」

「あ、いえ。えつと……」

僅かな怒りを含んだ由紀の溜め息に翔太が戸惑う。夫に関連した話題は、由紀にとって地雷なのだ。由紀はすぐさま現実に還り、翔太にソファを勧めると、くっつくようにピタリと座った。

「ゆ、由紀さん」

「はあ、なんだか感傷的になってしまったわ。翔太君の所為よ」

「ええっ!？」

「翔太君が夫のことなんか思い出させたから……」

そう言い、翔太の手に由紀の手が重なる。肩が触れ合い、息遣いまでも聞こえる距離感である。いつもなら理由を付けて離れる翔太だが、無性に場の雰囲気重く感じてしまい、そのまま動けなかった。

「え、えつと……」

「ごめんね。暫く、こうして居たいの」

「……」

「ダメかしら？」

「い、いえ。大丈夫です」

「ありがとう。翔太君と触れ合っていると落ち着くわ」

「ううっ、それは、その、光栄です」

「……」

「……」

「はあ。世の男が、みんな翔太君みたいなら良かったのに」

「ど、どういうこと？」

「また愚痴って良いかしら。夫ね、単身赴任を良いことに、不倫してるの。不倫って、翔太くんは知ってる？」

「え、ええっ？ 不倫って……ええっ!？」

「あら、知ってるのね。まあ、そんな珍しい話じゃないわ。夫に限っては、かなり自惚れが強くて、それこそ吐き気を催す程だったもの」

「……………」

「なんで、そんな人と結婚を？ という顔ね？」

「あ、い、いやっ……!!」

「良いのよ、笑ってちょうだい。そうして欲しいくらいよ」

「……………」

いつもの澁刺とした由紀の姿は見えない。子供のいる専業夫婦にとって、表面だけの仲より辛いものはないだろう。離婚をしても露頭に迷うだけで、夫の不倫を黙認する他が無いのだから――。

なんとか慰めたい状況だが、人生の浅い翔太には酷な話である。掛ける言葉が見つからず、それでも同情したい一心の翔太は、重なる由紀の手をいつの間にかギュッと握っていた。

「しよ、翔太君っ？」

「ごごご、ごめんなさい。なんか、握っちゃってましたっ!!」

「ふふ、ありがとう。暫く、こうしていい良いかしら？」

「は、はいっ……」

「ふふっ……」

肩を並べて座り、静かに手を握り合う。沈黙が続くも、気まずさはない。こんな状況ながらも翔太は、居心地の良さを感じていた。

一方で由紀の心は慌ただしい。まさか翔太から手を握ってくるとは、と、表面でシリアスを漂わせても、内心では踊りまくりである。異常の感度を誇る由紀は、翔太から伝わる温もりだけで再び愛炎を燃やしていた。

せつかくのムードが台無しだと言わんばかりに、由紀が股間を疼かせる。先刻のハグで開いた扉から、ドバドバと水が溢れて止まない。翔太の匂い、温もり、声だけで潮が噴きそうだった。

「……………」

こんな時に、みんなが翔太にキスしているという昼間の会話を思い出す。地域のアイドルたる翔太へと迫る若妻は多い。キスまで済ませた者も沢山居ると聞き、途端に由紀は自身から嫉妬の炎が燃え上がるのを感じた。

「もう駄目、我慢も限界だわ」

「えっ？」

「……ねえ、翔太くん」

「なんです？ 由紀さ……うわあっ!？」

唐突に、由紀が膝立ちの姿勢で翔太の下半身へと跨った。

股間が重り合う体勢に翔太が慌てて身を反らそうと足掻くも、馬乗りはそう易々と抜けられない。「しまった!」と思った頃には、もう手遅れだ。翔太の両肩をグツと掴み、由紀が唇の触れるギリギリまで顔を近づける。蕩けた瞳で翔太を見つめ、荒い息遣いで囁いた。

「キスしても、良いかしら？」

「えええっ？ な、なんで？ と、突然過ぎますよっ!？」

「突然じゃないわよ。だって、ずっとこうしたいと思っていたんだもの」

「そ、そんなっ……ゆ、由紀さん、結婚してるんでしょっ」

「あれだけ主人の愚痴を言った私だけど、そんな私も、どうしようもない人間みたいね。とにかく、もう翔太君を想う気持ちが止められないの……大好きよ、翔太君っ」

「でも由紀さん、結婚……」

「家族をほったらかしにする男を、いつまでも愛していられるほど、私は出来た人間ではないわ。ねえ、良いでしょう？　もう一年以上も翔太君のことが頭から離れなくて困っているの」

「そんな……」

由紀の吐息が降りかかる。身体が密着の状態にあり、視界は涙で潤んだ由紀の瞳が付いて離れない。あまりに魅惑的な由紀に、思わず翔太の喉も鳴った。

それが合図と受け取り、翔太の意思を待たずして由紀が口付けを交わす。最近ではキスも珍しくない翔太も、抵抗を見せずに由紀の唇を受け入れていく。互いに両手を背中に回して抱き合い、蕩けるように柔らかい弾力を確かめ合った。

「ん、ふうっ……んっ、んはあ……はあ……」

「んむうううっ、んっ！」

「あああああっ、あああ、しよ、翔太君とキ、キスツ、あああっ」

夢にまで見た翔太の感触に、由紀が成就のオーガズムに堕ちる。四肢をビクビクと波打ち、露骨な嬌声で快感に溺れる。感情の表現は声や愛液に留まらず、全身から滲ませる汗や、瞳から零れる涙でも訴えていた。

「んっ、むちゅっ、ちゅううっ、んっ、はあっ、あっ、んあああ♥」

「あっ、んんんっ、うううっ、んっ、ゆ、由紀、さんっ……も、もうっ」
「も、もつと、もつと味わわせてっ、んっ、ぢゆるううっ、んんっ」

数分が経過する。お互いの息が上がるも、由紀は唇を離そうとしない。息切れの翔太が空気を取り入れようと口を開くも、すぐさま由紀が自らの紅唇で塞いでしまう。二人の唾液が絡み合う内に、次第に翔太の瞳が性を孕んでいく。明らかな情火が炙り、由紀の腰を押し上げるように、翔太のイチモツが反り上がっていった。

「んっ、ふうっ、んむっ、ちゅぱっ、ちゅくちゅくちゅ、んっ、はあ……
幸せだわああ。もしかしたら、夫が不倫するのを、私は待っていたのかも
しれないわ。これで、やっと翔太君に愛を捧げられるっ、翔太君っ、んっ、
ちゅくっ、ちゅるるっ、ふちゅっ、ちゅくっ……大好きっ、好きっ、好き、
好き好きっ♥ んっ……しようふあくん、どお？ キスって、ひもちいい
でしょう？」

「ふうっ、んあっ、はっ………」

「聞くまでも無いかしら。ふふ、もう翔太君も普通に勃起する年頃なのね。
私のお尻を持ち上げようと必死に踏ん張っているのを感じるわ」

「……………っ!？」

濃厚なキスに酔った翔太が、隆起する股間を指摘されて我に返る。性に狭量な年頃において、人前での勃起ほど羞恥を感じる瞬間はない。流石に逃れようと抵抗するも、とつくに手遅れである。主導権は既に由紀にあり、翔太はピクピクと動きっぱなしの勃起に、ただただ無抵抗に恥ずかしさを覚えるばかりだった。

顔を真っ赤に俯く翔太に、由紀の母性が止まらない。

「落ち着いて。勃起は恥ずかしいことじゃないわ」

「そんなことないです。うう、すごく恥ずかしいです……………」

「愛おしいほど純粹ね。ここは、こんなに男らしいのに」

「ああ、ああああっ！ お、お尻で擦らないで……………!!」

「どうして？ 気持ち良いの？」

「あ、う、ううっ!!」

ズボンに屹立するテントを圧迫しながら、由紀が臀部でグリグリと動く。生まれて初めて芽生える「精」に翔太が戸惑う。口付けの経験は有っても、搾精されたことは無い。自慰の知識すらなく、焼けるように萌えた快感に、翔太は不安で涙した。

「あつ、あああつ、な、なに、これっ、き、気持ち良い!! た、助けて、助けっ、か、身体が熱い。溶けちゃうっ、頭も、こ、これ、頭、おかしくなっちゃういそうっ……!!」

「翔太君、もしかしてイクの初めてなの？ だとしたら、初めての射精がズボンの中では勿体ないわね。あなたの初めての精液……しつかりと私が管理してあげるっ!!」

そう言つて由紀は服を脱ぎ始める。シャツも、スカートも剥いて下着が露わする。かなりの露出度にゴクリと翔太が喉を鳴らすも、余韻を与える間もなく由紀は下着も脱いでいった。

一糸纏わぬ姿になり、艶めかしい華麗な肉体が露わとなる。

「あ、うう……」

人妻らしいムッチリした肉付きに、天から授かる熟れた巨乳……加えて鮮烈に輝く秘部は青少年の目に毒だろう。生まれて初めて目にする女性の裸体に、翔太は声も出せず俯いた。

猛暑と言われた夏の日に、あれだけの激しい接触をしていれば、由紀の全身が汗塗れなのも当然である。女の甘酸っぱい汗の臭いがムワツと漂い、汗で由紀の赤裸々が煌めくと、翔太の情動がより主張を示した。

「ごめんなさい、汗臭くて。あら、おちん○んが物凄く暴れているわね？
私の身体に興奮してくれたのかしら？」

「……………!!」

「嬉しいわ。こんな人妻の身体でも反応してくれるなんて」

「あ、あう……………」

「さっ、あなたの裸も見せて？」

「あっ、ヤ、ヤです。女の人になんて、見せられないっ！」

「そんなこと言わずに。下着の中とか、我慢汁でグシヨグシヨになって
気持ち悪いでしょう？ それに、良い？ これは誰しも、いつか必ず通る
道なの。早いうちに経験した方が良いわよっ」

「そ、そんな。で、でも僕、どうすればいいか、わ、わからないよ」

「大丈夫。全て私に任せてくれれば良いわ」

「……………」

「……………私のこと、嫌い？」

「そ、そんなこと、ない、です……………」

「ありがとう。それじゃあ、いい？」

「……………はい……………」

面と向かって「嫌い」と言える訳がない。卑怯な誘導により翔太が粒のような声で同意すると、由紀は喜悦の叫びを懸命に堪えつつ、ゆっくりと服に手をかけた。

「翔太くんのおちん○ん、初披露といきましょう。つ、遂に翔太君の裸を目にするのね。はあ、はあ、はあ、お、落ち着け、私っ……ふふふふふふふふふふふっ!!」

「……………」

狂喜の瞳で翔太を射抜く。笑みの零れも止められず、涎を垂らして服を脱がす由紀に、翔太が早くも後悔する。だが、そうこうしている内に服は次々と剥かれてしまい、最後の一枚であるパンツも容易く剥ぎ取られるのだった。

そうして翔太の象徴が現れる。年相応の小ぶりな牡竿が天井に向かって反り上がっている。その小作りなペニスに、由紀の正気がブチリと切れる音がした。

「きやああああああくくっ!! 翔太君のおちん○んだわっ!! 翔太君の翔太君のっ!! あああ、こんなに綺麗なおちん○んは初めて見たわ。これ、本当に可愛い……穢れを知らない、新鮮なおち○ちん……ゴクツ……」

クール且つシニカルと知れた由紀の、かつてないハイテンションである。まるでスターに出会った少女のように、由紀は翔太のイチモツに大はしやぎだった。

由紀が床に就き、愛おしそうに翔太のモノを目の前とする。

「はわああああ。我慢汁がどっぷり漏れてて、かなり熱いわっ！ それに、とつても臭いの。恥垢っていうのかしら？ ゴミが溜まっついて汚いのね。いますぐに私が掃除してあげるわ、翔太君っ!!」

「……………っ!？」

ペニスを嗅いで恍惚する。臭いと言いながらも、うっとりする由紀には翔太も言葉が無い。ただ、大人の女性に性器を弄られる羞恥に耐えられず、両手で顔を覆い、全身をプルプルと震わせていた。

「翔太くんのおちん○ん、とつても臭いわ♥ ふふ、恥ずかしがらなくて良いのよ、誉め言葉だから。新品なんだから、臭くて当然よね。ああああ、こんなに愛おしいだなんて思わなかったわ。欲しい。いますぐ欲しいわ！ あむうっ……………んっ、ふっ、ちゅうっ……………」

情欲が限界まで沸き上がると、由紀は飢えた獣のように御馳走へと齧り付いた。亀頭を啜え、髄を舐めるように我慢汁を啜っている。

「んっ、ちゅううう。じゆるっ、ちゆくっ、ちゆっ……」

「あああああつ！ ゆ、由紀さんっ、な、なにをつ！！ き、汚いですよ。ぼ、僕の……舐めるなんてっ。あうっ、うあああつ！！」

「んっ、ぢゆっ、ちゆくっ。これがフェラよ。男性が好むエッチの一つね。はむっ、んっ、それに、翔太くんのおちん○んは全く汚くないわよ。んっ、ぢゆっ、ぢゆっ……いえ、少し語弊があるわね。確かに、亀頭にはゴミが溜まっていて汚いけど、全然不快じゃないってこと。翔太くんのゴミなら、いくらでも舐めとって綺麗にしてあげられるから」

「うぐっ、はあっ、はあっ……そ、そんな……あああつ、な、なんかくる、なんかくるうっ、あつ、あああああああつ！！」

自らの唾液をイチモツに塗り、露骨に音を立てて亀頭を吸い上げている。バキュームの度に翔太が仰け反り、口から涎を零して快感を叫ぶ。絶頂が迫るに連れて、より声に艶が灯っていく。初めてのオーガズムに恐怖して、なんとか快感を堪えようとするも、もはや我慢は限界のようだ。

フェラが始まり一分と経たぬ間に、翔太が腰を跳ねらせて泣きじゃくる。身悶えと絶叫を繰り返し、幾度と腰を左右に振りながら、断末魔のような叫び声で射精に吐いた。

どぷっ、ぬぷうっ……とくっ、とくっ、とくっ……

直後、燃えるように熱い液体が由紀の口内に迸る。それが二度、三度と断続的に続くと、連動するように翔太の全身もビクビクツツと脈打つ。気の狂う刺激だったようで、翔太はソファアーにグツタリした。

「ああ、ああああ……あっ……」

口の中が翔太の白濁液で一杯になると、由紀が躊躇わず一息で飲み込む。愛する翔太の味に、由紀が満悦を浮かべた。

「ちよつと酸っぱいけど美味しいわ。ありがとう、翔太君……大好きよ♥
こんな気持ちになったのは、何年ぶりだろう？ 心の内に、温かい何かが広がっていく感じよ。とつても幸せだわ……」

「う、うううっ……」

亀頭にキスをする由紀も余韻に浸っている。相手に奉仕しただけなのに、ここまで充実感を得られるとは思わなかったらしい。由紀は由紀で翔太と同様に疲弊した様子を見せていた。

ここ十年近くと性行為で興奮を覚えなかったせいで、由紀は自分がもう閉経期に突入したのではないかと考えていた程だ。久々に感じる「女」の悦びに、由紀はどっぷりと陥った。

（ただ、夫に飽きていただけなのね。私も、まだまだ女みたい。翔太君に触れてるだけで、こんなに昂っちゃうんだから。これって、本当に恋なのかもしれないわね。どうしよう……娘の同級生に、ここまで感情を寄せてしまうなんて♡）

「つて、翔太くん、大丈夫？ 賢者タイムに入っちゃった？」

「あ、あ。だ……だ、大丈夫です。賢者タイムって？」

「いえ、気にしないで。ぼーっとして、気持ち良かったのかしら？」

「あう、ぜ、全然わかんないです……なにがなんだが……」

「でも、気持ち良かったでしょ？ 涎まで垂らしちゃってたわよ？」

「……こ、こんなこと……しちやっても良いんでしょうか。こういうのは、その……も、もつと大人になつてからするものだ……」

「ふふ。翔太君は本当に純粹なのね。今時は、こんなの珍しくもなんともないわよ。実際に、娘の佐紀にも彼氏がいるくらいよ」

「えっ!? そ、そうなんですわね。佐紀さん、彼氏がいたんだ……」

「あらく、もしかして狙ってた？」

「い、いえ。そんなこと……ないです」

「あらあらく。隠さなくても良いのよ？」

「う、す、少し気になってます」

「娘に恋してくれるなんて嬉しい限りだわ。よく私と娘はソツクリだって言われているの。これが本当なら、私にも脈があるってことよね♪」

「そ、それって、どういう…」

「言ったでしょう。私は、翔太君が好きなの。大好きなの。今日の行為でそれは確信になったわ。いままでも好きだったけど、それは「愛」だった。いまは、翔太君に恋する乙女よ」

「えええ？ えっと、その、嬉しいです」

「翔太君は、私のこと、好き？」

「あ、う、う…」

由紀が翔太へと凭れ掛かる。裸で密着した状態から、そんな質問を投げ掛けるなんて意地の悪い乙女（人妻）である。この有り様で由紀の想いを突っぱねる度胸が有るのなら、翔太も此処までの苦労は無かつただろう。

翔太は、茹でダコのように顔を真っ赤に染めながら、消えるような微かな声量で由紀に「好き」と答えた。

「無理強いしてゴメンね翔太君。でも幸せ過ぎてどうかしちやいそうだわ。ありがとうね、年取った人妻の、こんな気持ちを受け止めてくれて」

「い、あ……はい……」

自然な流れで唇が重なった。

幸せに満ちたキスである。由紀に限らず、翔太からも幸福感が滲み出ている。半ば強制的な行為であったが、それでも身体を重ねた事実が大きく、既に翔太は由紀へと特別な感情を抱き始めていた。

由紀の抱擁に照れつつも、至福と欲情が交差していく。

「あら、翔太君ってば、出したばかりなのに、流石ね」

「な、なにが？」

「男性は、そう何度もイケないものなのよ。少なくとも、ウチのダメ夫は一日に一度しかイケない玉無しだわ。それはさておき、まだまだ元気なら、最後まで行きましようか？」

「え、最後まで、って？」

「当然セックスよ。まだ知らないかしら。まあ、私に任せて、ね？」

「はい……」

指で開帳された秘部に、翔太の視線が釘付けされる。ねっとりした熱い視線を一身に浴びながら、由紀は熟された肉壺を以て、青筋立った肉竿を芯まで包み込んでいった。



ソファーに腰を下ろす翔太に、正面から騎乗する対面座位の姿勢である。この体位を由紀は最も好んでいる。セックスしつつ顔を見合わせられるし、なにより自らの巨乳を味わって貰えるからだ。

「ふふ。どう？　どんどん……入っていくわっ!!」

「う、あああつ、な、なにこれ……あ、熱いのが……僕のモノがすっごい熱いっ!!　どうなってるのこれっ!　あああつ、あうっ!!」

「女性の味よ。女の肉で圧迫されていくの、とても気持ち良いでしょう」
「ああああ、と、溶けそうですっ!!」

翔太の男根を余す所なく包み込み、由紀が絶頂を遂げる。肉壺で愛液が迸り、どんどん翔太のイチモツに絡みついていく。腰を動かす度に体液が零れてソファーや互いの下半身を濡らした。

「あ、熱いっ、ううう、グネグネしてるっ、うう、搾り取られるっ!!」

「そう、私が絞り出してあげるわ。全て、私の中につ……!!」

淫唇と陰茎が擦れて卑猥な粘液音が響く。未知なる快感を前に、翔太が鼻にかかった声で喘ぎ出す。自身になにが起きているのか、正直さっぱり分からないが、とにかくいまは由紀に全てを委ねて、降り掛かる快感を一杯に味わおう——といった様子で快楽を受け入れていた。

一方で由紀も未成熟なペニスの特色や、翔太に受け入れられた事実から、異様な興奮を覚えてしまう。翔太の未熟な男根では、由紀の肉壺を奥まで突き刺せない。にも拘わらず、一突き毎にオーガズムに苛まれて、それはイキ狂うに等しい連続だった。

「ああああっ……翔太くんのおちん○んが入ってるわ!! はあ、はあ……一突きされる度につ、んっ……なにもかも満たされていくような、そんな気分よっ!! まるでっ、んっ、魔法にかかったみたいっ!!」

「はあ、はあ、はあ。僕は由紀さんが喜んでくれて嬉しいですよ!!」
「ありがとう。嬉しいわ。でも、私だけが満足するのは嫌よ。翔太君もっ、一緒に気持ち良くなりましょう? 二人で一緒にっ!!」

「僕も、気持ちいい、ですよ。でも、よく分かんないです……自分の体が、自分のじゃないみたいな感じで……はあ、はあ、はあっ……!!」

翔太もしっかり快樂へと浸れるように、由紀が巧みに緩急を付けていく。気持ち良くなりたい自分がいるのは確かだが、それ以上に由紀は幸福感に満ちた翔太が見たかった。

「ま、また中っ、とろとろが溢れてきたっ!!」

「気持ち良いと溢れちゃうの。全部受け止めてっ♥」

「は、はいっ!!」

「ほら、見て。あなたのおちんち○が、私にすっぽり埋まっているわっ」

「はあ、はあ、はあ……ゆ、由紀さんっ、お、お胸、大きすぎますよ……」

「僕……が、どうなってるのかなんて全然見えないです」

「ふふ。天然の巨乳よ。子供の頃から大きくて、悩みも絶えなかったっけ。それより、今日は色んなことを初体験したわね。快樂から、フェラ、射精、裸体、セックス。でも、まだおっぱいの感触は確かめていないんじゃないかしら? もっと、揉んだりして良いのよ?」

「じゃ、じゃあ……失礼します」

それこそメロンの大きさを誇る由紀の乳房が、翔太の視界を覆い尽くす。谷間にすっぽりと翔太の顔が埋まっている。由紀は腰をサイドに揺らして、翔太に乳ビンタを喰らわせてやる。弾力をアピールすると、翔太が果敢に手を伸ばす。実は前々からおっぱいに興味があつたらしく、その手付きは由紀も驚く程に厭らしかつた。

「うあっ……すごい、柔らかい……」

「んはああ、物凄い勢いね。や、やっぱり男子は、おっぱいが大好きなのかしら? い、良いわ。好きなだけっ、揉みしだいてっ!!」

「は、はいっ」

右手で乳房を軽く摘まみ、力を加えた分だけ指が肉に沈んでいく様子に翔太が感動する。今度は両手で左右のおっぱいを弄ってみる。何度か繰り返してみると、次第に柔らかさを増していった。

「い、良いわあっ、お、おっぱい、揉まれるだけでイツちやうなんてっ!! も、もつと強く揉んでも良いのよっ!! それと、揉むだけじゃなく、その、翔太君に乳首を舐められたいわっ!!」

「乳首……な、舐めるって、こうですか？」

「ひあっ、あああっ、くうううっ……!! 翔太くん、上手すぎだよっ!!」
「ぢゆるっ、んっ、むちゅっ、ぷちゅっ、くちゅっ」

「あと……たまに、歯を立てて乳首を軽く噛んでくれたり……」

「あむっ、んちゅっ、ちゆるるっ、ちゆくっ。噛む……? んっ、カリッ、コリッ、ぢゅっ、ちゅぱっ……こ、こう? キリキリッ、キリッ……」

「んっ、ひゃああああああああああんっ!!」

まるで乳児のように、翔太がギンギンに浮き立つ乳首をしゃぶり尽くす。さらに指示を忠実に受け止め、乳首に歯を立てて優しくガリガリ鳴らすと、由紀はオーガズムの渦に吞まれて何度も意識を失いかけた。

更には、バケツを引つ繰り返した様に、尿道から潮がバシヤツと漏れる。谷間に埋もれた翔太には聞こえなかつたようだ。翔太が懸命におっぱいを弄る間に、延々と由紀は潮を垂れ流していた。

「んはあつ、あひいいつ！ 乳首を弄られるだけなのに……こんな気持ち良くなつたの、初めてつ！！ イ、イクツ、またイツちやうつ……というか、で、出ちやうううつ！！ なんて、どうしてこんなに気持ち良いのかしら、ああああつ、んっ、ふあああつ、ああつ……翔太君っ……好きっ、大好き。もつと、舐めて、吸ってつ、噛んじやってえつ！！」

「は、はひっ。んくっ、んっ、ちゅっ、んっ、んぶううつ、カリツ、ガリガリツ、ん……はっ、あつ、ゆ、由紀さんっ。ぼ、僕ま、また出しちやいそうっ！！ あうっ、あつ、あつ！！」

快楽に炙られた翔太が音を上げる。胸乳を愛撫しながらも、ヌルヌルと濡れそぼつ由紀の膣口に責められ続けて限界に達したのだ。オーガズムを迎える翔太のペニスが本日最大の怒張を遂げると、由紀も喜びに染まった嬌声を轟かせた。

「ひああつ！ 翔太くん、イキそうなのね。良いわっ、このまま出してっ。私も、もうイク……というか、さつきからイクツばなしっなのおっ！！」

「うううっ、由紀さんっ、由紀さんっ!!」

「も、もつと名前を呼んでえっ、乳首っ、オマンコもっ……気持ち良くて、そのまま、千切れるくらい齧ってっ!! 翔太君っ、ちん○んで私の奥まで突っついてええっ!!」

「あっ、出ちやう……出ちやうっ!! 由紀さんっ、ふあああああっ!!」
ドクツ、ドクツ、ドクツ……

「うあっ、あああああっ!!」

「はああああああっ、しようた、くうううんっ!!」

絶叫と共に、翔太の悦楽が炸裂した。

淫肉で締め付けられたイチモツが、搾り取られるように精液を迸らせる。二度目の射精も勢いが衰えず、何度も脈打って膣を満たしていく。濁流を子宮で全て受け止めると、由紀は陶醉したように瞳を蕩けさせて恍惚へと陥った。

「はあ、はあ、はあ……」

「ふう、ふうっ、ふうっ」

「精液っ、熱い精液がお腹の中で広がっていくわ……」

「あうっ、はあ、はあ……はあ……はあ……由紀さん……」

共に名前を呼び合い、仰け反らせた身体をわなわなと震わせる。意識を失いかける程の壮烈なエクスタシーから、二人は暫く動けずに、繋がった儘の状態で見前を呼び合うのだった。

……それから一刻余りが移ろう。

先に由紀が立ち上がり、体液で汚れた翔太をタオルで拭きとり始めた。

「あつ、すみません。後は僕がやります」

「良いのよ、翔太くんは寝てて。初めてのセックスで疲れてるでしょう？

ココは、まだ元気そうだけれどね♪ とにかく、横になってて良いわよ」

体力を相当に消耗したらしい翔太は、ソファアにグツタリとしている。

僅か十数分の出来事だったが、翔太にとってはこれ以上ないくらい濃厚な時間だったろう。どつと余韻が押し寄せ、起き上がるうにも心身の疲弊に、由紀へと甘えることにした。

「ごめんね、翔太君。仕事の途中だったのに」

「あつ、そっか……仕事の途中だったんだ!! お、起きなきゃ……」

「ごめんね。もし怒られたら、私の名前を出して良いから」

「あ、ありがとうございます。うう、身体が重い。このまま眠りたいかも。

由紀さんの膝枕、とつても気持ち良いです……」

「……ドキッ」

甘えてくる翔太に、思わず由紀が赤面する。胸の高鳴りが抑えられない。これは、いよいよ本気で翔太に恋しているのだなと苦笑いを浮かべていた。「や、休みたくなかった時は、いつでも来なさい。私は、時間だけは余っているから。本当に……い、いつでも空いてるから……」

「分かりました。あ、明日は空いてますか？ お、お話したいです」
「勿論よっ!!」

「じゃあ、また明日に来ます」
「ええ」

身体を拭いてもらい、翔太が服に着替える。まだまだ余韻が残っており、まだ由紀と一緒に居たいのが翔太の本音だが、仕事だから仕方ない。また明日に来るといふ言葉に、由紀も内心で小躍りしていた。

「それじゃあ、行ってきます」

「ふふ、いつてらっしやい♥」

最後に軽くキスを交わしてお別れとなった。

翔太の姿が完全に見えなくなるまで由紀が見送っている。時折り翔太が振り向く度に、由紀が満面の笑みを返す。まるで新婚夫婦だった。

「ふふ。この掛け合い、興奮しちゃうわ」

「私、翔太君とエッチしちゃったのよね。いえ、それより翔太君は、私のことを好きって言ってくれたわよね。それがなにより嬉しくて仕方ないわ。例え、無理強いだとしても……」

「恋人は、流石に無理よね。一番の理想は、翔太君を引き取って、ずっと一緒に暮らすことかしら。一緒に暮らす？ やだ……考えただけで濡れちゃったわ……」

「ああ、今夜も翔太君をオカズにオナニー三昧ね」

「あつ、写真を撮れば良かったわ。ううう、あ、明日、来てくれるかな」

家に帰り、由紀が再び余韻を味わう。膣には、まだ翔太の体液が残っている。それを指で掻き出しながら、今日の出来事を妄想して自慰に耽るのだった。

第二話
いびつな痴女

初体験から暫く、いつも通り翔太が牛乳の配達をしていると、由紀から見慣れない通信機器を渡される。翔太には見慣れないだけであり、それは現代では誰もが所有するスマホだった。

「はい、これ。翔太君にあげるわ」

「これ、スマホじゃないですか？」

「ええ、どうみてもスマホだわ。翔太くんにプレゼントよ。これで私たち、いつでも好きな時に連絡が取れるわね♪」

「い、いやいや！ 貰えませんよ、こんな高価な物！」

「大した物じゃないわ。翔太くんって、携帯電話を持ってないでしょう？ 仕事してるんだし、連絡手段が無いのは一般的に不便だと思うの」

「それは……そうですけど。いや、でも払うお金がないです」

「プレゼントって言ってるでしょ。対価なんかいららないわ」

「でも……」

「いま流行りの格安スマホよ。ひと月に二千円も掛かってないわ」

「んん……」

貧しい生活を強いられてきた翔太には、どうしても善意に頑なな抵抗を覚えてしまうようだ。それを受け、由紀がニヤリと笑う。

「対価を要求すれば、負い目を感じずに済むのかしら？」

「え、えつと……」

「なら、私は対価として一日一キスを所望するわ！」

「そ、それって、一日に一回キスをするってことですか？」

「ええ、言葉通りよ」

「でも、由紀さんにキスって……それで良いんですか？」

あの初体験から、由紀と翔太は定期的に愛し合っていた。

最初こそ由紀による一方通行な愛情だったが、回を重ねる毎に、翔太も恋心を露わにして、現在では互いに純然たる愛を育む間柄にある。いまや由紀とのキスに躊躇いなど感じなかった。

「あら、ありがと。でも私が言ってるのは、翔太君からの自発的なキスよ。確かに沢山のキスを交わしてきたけど、思い返してみれば、翔太君からのキスは一度だって受け取ってないわ。全て、私からのキスじゃない。私も翔太君からキスしてもらいたいわ!!」

「言われてみれば。そうですね。わ、分かりました」

「まあ、嬉しい。さあ、では早速お願いするわっ!!」

「は、はい」

翔太の身長に合わせて由紀が屈む。目を瞑り、プルプルで瑞々しい唇が差し出される。その魅惑にドキツと胸を高鳴らせた後に、翔太はゆっくり由紀と重なった。

「ちゅっ」

「ん……………」

「はあ、最高だったわ」

時間にして五秒――。

唇を重ねただけのピュアなキスである。けど、互いに満足そうな表情を浮かべている。身体の浮くような感覚と、四肢の溶ける恍惚感に包まれていた。

しかし、すぐに由紀の表情が陰しくなる。

「じ、自分からキスって緊張しますね」

「……………」

「由紀さん、どうしました？」

「翔太君」

「は、はい？」

「今日、ここに来るまでに、私以外の何人とキスしたの？」

「え、えええ？ な、な、なんで……そんなことを？」

「女の嗅覚を舐めないでくれるかしら。唇だけでも複数人、服には沢山の他の女性の匂いが染み込んでるわ。極めつけは、首筋のキスマークよ」

「あ、あ……あう……ご、ごめんなさい。ごめんなさい……断ったんですけど、大勢の人に囲まれて……その……うっ、うっ、ああ……」

女性とは臭いに敏感な生き物だ。想い人から、別の女性の臭いがすれば、気付くのも当然である。複数の匂いを嗅ぎ付けた由紀は、少しムツとして、モテる翔太に意地悪するように指摘した。

由紀としては、ちよつとした軽口のもりだったのだ。

しかし、翔太なりにも罪悪感があったらしい。まるで不倫のバレた夫のように翔太が慌て始める。全身から汗を流して挙動不審に、最後には涙を流すに至ってしまった。

泣きじやくる翔太に、由紀も慌てて謝罪する。

「わああ、ごめんなさい、翔太君。からかっただけなの。責めるつもりはないから……泣かないで……ね？」

「ううっ、でも、僕が好きなのは由紀さんだけなのに……」

「ドキッ♥」

「うう、ごめんなさい」

「コホン。ねえ、顔を上げて。別に怒ってないわ。私たちは両思いだけど、付き合ってる訳ではないのだから。認めたくはないけど、翔太君は地域のアイドルであり、みんなの存在なの」

「うう、僕としては由紀さんと……」

「それは無理だってことは、アナタも分かっているでしょう？」

「……はい」

「うふふつ、でも翔太君の気持ちは受け取ったわ♥」

「……」

「さ、今日はエッチ無しよ。翔太君も、そろそろ仕事に戻りなさい」

「わ、分かりました」

「……明日はエッチしましょう？」

「はい、是非また!! お願いしますっ!!」

「ええ、私って幸せ者ね」

「僕も幸せです!! じゃあ、行ってきます!!」

「気を付けてね。行ってらっしゃい♥」

最後にもう一度キスをすると、翔太は軽い足取りで配達に戻るのだった。

しかし、翔太の高揚した気分も束の間である。続いての配達先に翔太の顔が段々と苦みを帯びていく。由紀との関係で女性に対する免疫も多少は改善されたものの、次の届け先に構える人物には未だ苦手意識があつた。

「皆木七理みなぎ ななりさん……やだなあ」

道すがらポツリと呟く。目的地である皆木家の若妻こと七理も、由紀と同様に翔太を溺愛しているのだ。しかも七理は由紀と違い、倒錯者として知られている。平たく言えばサディストであり、翔太を苛めては悦に浸る変態だった。

「……着いた。皆木さんって怖いんだよなあ。性格とか、それと見た目も。怖いから、いつも言いなりだけど、これからは断る勇氣を持たなくちゃ」
深呼吸を繰り返して、意を決してインターフォンを鳴らした。

ピンポンと、昔ながらの音色が響くと、ドア越しにドタドタと足音が近付いてくる。その足音は、明らかに一人のものではなく、すぐに翔太を緊張させた。

ガチャツ

「こ、こんにちは」

「ショウちゃん、遅いよ。今日は来てくれないのかと思ったじゃん!!」

出迎えるなり、七理が乱暴に翔太の頭を撫でる。粗暴な性格は外見にも表れており、自己主張の激しい化粧と、極めて目立つ青髪が目立っている。ヤンママという呼び名がピッタリな存在だった。

「皆木さん。遅れてすいませ……」

「うわー、お姉ちゃんが言ってたのって、この子？ いや、マジで可愛いじゃん!! へえーお姉ちゃんが話題にするのも分かるわあ♪」

「沙八、アンタもシヨタコンだったの？ マジウケるんだけど!! でも確かに、ちっちゃくて可愛いねーこの子。女の子みたい」

七里だけでなく、奥から見知らぬ女性が二人も現れる。どちらも上乳が見える露出度の高いブラウスを着ており、そこから見える乳房には大きな入れ墨が刻み込んであった。

頭髪を明るく色揚げ、七理と同様に派手な化粧で着飾っている。やはり、こちらにも翔太の苦手なタイプのようだ。二人の登場だけで、翔太の表情が明らかに変わっていた。

「んーなにビクビクしなくていいーでしょ。妹の沙八と、その友達の蘭らんだよ。いま、ウチで蘭の独身最後のパーティーやってんだ。シヨウちゃんも来な。拒否は許さねえぞ」

七理が状況を簡潔に説明すると、いきなり翔太の腕を引っ張って奥へと拉する。翔太が配達に来ることを事前に聞かされていたのだろう、沙八と蘭の二人が即座に翔太の真横へと就き、離さないように腕を捕らえた。

「あ、あの……仕事があるので、もう……」

「ダメに決まってるでしょ。ちよつとで良いから、ウチらに付き合いな。妹ら、シヨウちゃんに会いたくてコツチまで来たんよお？」

なんと身勝手な話か。今度こそ誘いを断ると決した翔太だが、そもそも粗暴犯である七理を相手に抵抗するなど不可能な話であり、結局と今日も無理やり付き合わされることになった。

今日は七里だけに留まらず、仲間の沙八と蘭も一緒だ。

翔太の不安も、いつもより三倍増しだった。

「よろしくね、シヨータ君っ♪」

「翔太君、よろしく♡」

「は、はい、よろしくお願いします」

「私ら、ずっと翔太君に会いたかったんだよ。お姉ちゃんってば、いつも君の話ばかりでさあ。シヨータコンなのは知ってたけど、今回はマジらしいから、私も気になって来ちゃったんよ♪」

「さ、沙八っ、余計なことは言わなくて良いからっ！ それに、べ、別にシヨタコンじゃないし。ただ、シヨウちゃんが気に入ってるだけ。だって見てよく、こんなに可愛い男の子ってある？」

「ま、確かにね。うわく、身体すっごい柔らかーい♪」

「さすが、男子○学生ってどこ？ いや、これマジで癖になるね……」

パーティという名の酒盛りにも、翔太が三人のヤンママから揉みくちやだ。七里が背後から翔太を抱き締め、沙八と蘭も翔太の彼方此方に手を伸ばす。性を萌芽した翔太は、これだけでも股間を反応させてしまう。逃れようと強く抵抗していると、翔太のポケットから何かか床に落ちた。

「あっ！」

「あれ、これスマホ？ シヨウちゃん、スマホ買ったの？」

「うう……」

「なんだー、早く言ってよ。連絡先交換しよ♪」

「良いなー、私も良い？」

「あ、アンタは要らないでしょ。住んでる場所が遠いんだから」

「うるさいなあ、早く貸して」

「あっ、もうっ!!」

「まだ一件しか登録されてないね。この深山由紀って誰？」

「ああん？」

「うっ……」

翔太が青ざめる。由紀と七里の仲が悪いことくらい翔太でも分かっている。由紀の名前が出るだけで七理は不機嫌になる。ましてや、スマホを貰ったなんて知られたら、どんな反応をしてくることか。

なんとか誤魔化したい気持ちはあるも、嘘をつく技術を持たない翔太は、この場を切り抜けることが出来ず、七理のプレッシャーから、あっさりと経緯を自白するのだった。

しかし、由紀との性交まで白状する必要はあったのだろうか？

無駄口を叩いた翔太に、七理が徐々に険しい表情へと変わっていく。

「はああああ!! それマジで言ってるの? あのオバサン、PTA会長の癖に、なにやってんだよ。つうーか、普通にアウトだろ、それって。あー、あの偽善者マジ有り得ねえよ!! あー、クソがあっ!!」

案の定に、七里の激昂が部屋に飛び交った。

天敵に想い人を取られた怒りが露わになる。本気で切れており、翔太を暴力的支配するには十分過ぎるインパクトだった。

「お姉ちゃん、嫉妬かよ」

「いや、それ以前に深山由紀が嫌いなんだよ。私のこと見下してババアの癖に妙に色気があるのもムカつく。偉そうに振る舞っておきながら、私のシヨウタに餌付けしてるし!!」

やれやれと、沙人と蘭が肩を竦める。七里との付き合いが長い二人には、これからの展開が目に見えている。七里の指示を待たずして、蘭と沙人は黙って翔太の両腕を掴んだ。

「ゆ、由紀さんを悪く言わないでください……」

「あ？ シヨウタ、深山由紀に無理やりされたんだろ。キスは愛情表現で済むけど、セックスはやりすぎだよなあ？ なあ、無理やり迫られたって告発すれば、すぐに奴との関係が切れるぞ？」

「や、やめてください。全然、無理やりじゃないですから……」

「そうは言っても、知っちゃったからにはねえ？」

「そうだね。しかも、そのミヤマっての、人妻でしょ？ 学生と浮気までしちやっってるって世間や旦那に知られたら、色々とヤバいだろうね？」

「うん、エッチはマズいね。キスがセーフなのも変だけど」

「とにかく、黙ってて欲しけりや……分かってるよなあ？」

「な、なにをすれば良いんですか？」

「ま、せいぜい私のご機嫌取りになると良いさ」

「……？」

「つまり奴隷だよ。今後は私の命令には絶対に従ってもらうんだよっ！」

「ええっ？」

「お姉ちゃーん。そこ、私『たち』って言ってくれない？」

「うるさい。とりあえず、シヨウタ。ミヤマが好きなんだろ？」

「………」

「アイツを失脚させたくないなら、せいぜい私らのご機嫌を取るんだな」

「な、なにをすれば良いんでしょうか？」

「なんでも、だ。私の言うことには絶対に従うこと。分かったな？」

「う、ううっ……はい……」

既に翔太は涙目だった。

元々、七里に逆らえる度量など無い。わざわざ負い目を持たせなくても、いずれは同じ結末へと至ったことだろう。だが、大義名分を盾に翔太への罪悪感が消えるのは喜ばしいと七里が微笑む。「合意」という形で翔太と営めることに、七里はこれ以上ない興奮を感じていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

「お姉ちゃん。それじゃあ、まるで盛りのついた犬だよ」

「う、うるさいっ、シヨウタの腕を離すなよ？」

「はいはい」

「はあ、はあ、シヨウタっ、んっ……」

「んむうっ!？」

「きゃー、キスっ♪」

「翔太君、意外と抵抗しなかったね」

「なんかキスに慣れてるって感じ」

「あむっ、んっ、くちゅっ……」

「んんんんっ、あああっ、シヨウタツ!!」

「ん、ちゅっ、んっ……」

「ん、んんんんんっ、シヨウタア……♥」

手始めにキスから入る。翔太の両腕を蘭と沙人が取り、動けぬ翔太へと七里が行く。未熟で柔らかい翔太の桃唇を奪い、その刹那に七里が無言の絶頂へと達する。全身が一気に火照って下着を濡らしつつ、何度も何度も口付けに没頭するのだった。



「……んっ、んむうつ、んちゅっ。この天然すけこまし……唇から色んな女の味がするぞ？ モテるからって、いい気になってんじやないだろうな。んっ、ふう、ふう、んんっ……」

「んんんっ、そ、そんな。僕モテてないです……」

「んっ、ふうっ、んっ……そういうのは謙遜とは言わないぞ。ただの嘘だ。奴隷の分際で私に嘔吐くのは許さないからな？ 団地にいる殆どの人妻とキスしてるくらいい、みんな知ってんだよ」

「んっ、ぬちゅっ、ちゅっ……ご、ごめんなさいっ」

「いい気になるなよな？」

「な、なってますん、よっ……」

「そう言いながら、ココはもうこんなになってるみたいだけどね〜？」

「——あ、ぶっ!? ひっ、ひんんんっ！」

「ちっ、おっ勃てやがって。前はキスしても勃起なんかしなかったのに」「んんんんんんっ!!」

接吻の渦中にて沙八が背後から翔太に擦り寄る。密着すると、股間へと手を伸ばして的確に膨らみを捉える。由紀によって愛欲が萌芽した翔太は、姉妹のネツキングに確かな愉悦を覚えていた。





「ちっ、シヨウタの魅力は純粹な所だったのに……キス程度で勃起なんかしてんじやねえよ……純情なシヨウタが好きだったのに。セックス覚えた淫乱な餓鬼とか超興奮ざめなんだけど。んっ、ちゅっ……ぶちゅっ、んっ、んっ、ふうっ、ちゅっ……」

「そう言いつつも、唇は離さないんだね、お姉ちゃん。ほら、嫌いな人に見たい人を取られたからって怒らないであげなよ。翔太君はモテる子なんだからさ。年上として歓迎してあげなきや♪」

「んっ、ふあああっ、あっ、さ、触らないでっ、ください……んくっ、み、皆木さんっ、は、離してっ!! あっ、そんなに強く握らない、でっ!!」

「あくん、こんな歳して硬あくい♥ ねえ、蘭も触ってみて」
「う、うんっ」

「あああっ、んっ、ふうっ、んちゅっ、あああっ……」

前後から皆木姉妹に嬲られる。七理からはキスが飛び、背後の沙八より股間の膨張を鷲掴みされる。翔太に逃れる術はなく、複数の攻撃を受けて恍惚としてしまう。全身が戦慄いて頬が紅潮する。下着の中では我慢汁が溢れてクチュクチュと音を立てていた。

そこに蘭も加わり、あれよあれよと翔太の理性が剥がれていく。

「ああ、でもやっぱりシヨウタ可愛いつ!! ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……
ずつとこうしていたい。ねえ、ミヤマなんかより、私と恋人になろうよ?
私の方が若いし、そもそもミヤマは人妻じゃん」

「お姉ちゃんも人妻だけどね」

「うるさい。シヨウタを想う気持ちだってミヤマより……」

「お姉ちゃん本気だなー。気持ちは分かるけどね。こんなに可愛いんだし、
私もコツチに引っ越しちやおうかなあ。そうすれば、私とも毎日エツチ
出来るよ、翔太君っ♪」

「ええっ!？」

「いや、来んなよ。マジで……」

七理は学生の頃からワルとして知られていたが、それでも妹の沙八には
相変わらず頭が上がりなかつた。

沙八の軽口一つにも七里の肝が冷える。やがて撫でるだけでは満たない
沙八は、その魔手を七里と翔太へと向け始める。舌なめずりをする実妹に、
また今日も七里は顔を引き攣らせた。

「お姉ちゃん。一緒にキスしよ」

「え……」

「ちよつと喉が渴いちやった。翔太君とお姉ちゃんの唾液で潤いたいの」
「ア、アンタねえ……んっ!？」

「翔太君。二人と同時にキスしたことある？　気持ち良いでしよ〜」

「んむうっ、こ、こら、沙八っ……」

「んちゅっ、んっ、ぬちゅっ……」

唐突に沙八がキスに加わる。不意に実妹の舌が伸びて七里はパニックだ。翔太が七里を跳ね除けられないように、七里もまた沙八の支配下にある。実妹ともキスをするシチュエーションに七里の顔は真っ赤である。二人と口付けた経験が無い翔太も、あまりの快感を前に舌鼓が鳴った。

「翔太君、ホント整った顔してて可愛いっ……んっ、んちゅうっ、我儘なお姉ちゃんに目を付けられちゃって大変だったね。ちゅっ、ちゅくっ……翔太君。もし、お姉ちゃんのイジワルに耐えられなくなったら、いつでも私に泣きついてきて良いからね？」

「お、おい、変なこと吹き込むよな!!　ってか、蘭はコレでいいわけ!?　レズだろ!?　沙八と付き合ってたんだろ!?　なのに、シヨウタと堂々とキスしてるぞ!？」

沙八の親友である蘭は同性愛者だった。

結婚も、いわゆる仮面夫婦として世間体を気にした対策である。

「私は、臭くて野蛮な男が嫌いなだけ。翔太君なら受け入れられるかも♥
顔だって女の子みたいに可愛いし。ああ、でも私だけ蚊帳の外なんて嫌っ。
ねえ、私もキスに混ぜてっ!!」

「それじゃ、四人でキスしよー♪」

「……………ツ!!」

「よ、よろしく、翔太君。七里義姉さんが言った通り、私は沙八と恋仲にあるの。でも、沙八は束縛されるタイプじゃない。翔太君とのキスを拒めないのなら……………いっそのこと、私も翔太君の愛人になるっ!!」

「あ、あ、あっ……………んっ、んちゅっ、んんっ!!」

「ふああああっ、しよ、翔太君の唇っ、なにこの柔らかさっ!? 女の子のよりも柔らかい。こ、これが男子○学生の唇っ!!」

遂には、蘭もキスに加わった。

伸びる翔太の舌に、三人の温もりが絡み付く。未熟ながら感度の優れた翔太は、一人とのキスでも達する勢いだ。一挙に三人からキスをされれば、それはエクスタシーなる言葉では表せない、理性の溶けた恍惚の次元へと引き摺り込まれるのだった。

翔太の弾力に、蘭も愉悦に融ける。未経験の領域に足を踏み入れて脳が驚いているかのようだ。翔太の舌を軽く舐めただけでも拘わらず、手足の先まで融ける感覚を蘭は味わっていた。

「あああ、翔太君っ、沙八っ!!」

「蘭っ、私とキスしてる時より幸せそう。ちよつと複雑……」

「ご、ごめっ、でも、凄くて……」

「それは尤もだね。若さなのか、それとも翔太君だからなのか。とにかく、最高の逸材が見つかって幸せな気分だよ。旦那も元カレも、全く使い物にならないからね。危うく私もレズになる所だった」

「……うう、その言い方は酷い。けど、沙八が幸せなら……」

「ちよ、ちよつと二人とも。ショウタは私のんだから……」

「お姉ちゃんに独占させないよー」

「ぺちや、ぺちやっ、ぬちやっ、ぴちやっ……」

やがてディープキスでは飽き足らず、三人は競うように翔太の顔を舐め始める。それこそ人懐っこい愛犬のように、翔太の顔面を満遍なく粘液で穢していく。口内に唾液をたっぷり溜めては、露骨な音と共に翔太に塗り付け、これでもかと穢し尽くすのだった。

「んっ、んあああ、な、なんで顔なんか……んっ、な、舐めるのっ!!」

「だって、柔らかくて美味しいんだもん。んんんっ、べちゃっ、ちやつ、くちゅっ、ぐちゅぐちゅっ、ちゅくっ。美味しい……こんなに柔らかい唇、女として超羨ましいっ。ほっぺも鼻も、ああ美味しいっ!!」

「あっ、ああああ……あっ、ああ……」

「んちゅっ、くちゅっ、翔太くんのほっぺた、美味しいね♥」

「うん。ちゅっ、にちゅっ、……んっ、ちゅっ、んっ」

「ひっ、あ、かっ……顔中、舐めないでください……や、やめ……」

「気持ち良いでしょ？ 止めて良いの？」

「シヨウタ、こんなに勃ってる。出したくて仕方ないんじゃないの？」

「あううっ!？」

瞳、耳、鼻、口、頬、全体に舌が走り、翔太の官能も限界を迎えている。

瞳は徐々に虚ろに、翔太の意識は上の空である。性に疎い翔太も、流石の集中砲火に快感を露呈していた。

「お、おね、がい、します……」

「ん？ どーした、シヨウタ？」

「だ、出させて、ください……」

「……!?」

「き、気持ち良すぎて……あ、頭が、へ、へんになっちゃいそうなんです。も、もう我慢、できない。お、お願いします……だ、出させて下さい……うあああ……」

「ふんっ、私のシヨウタはそんなこと言わないだよ……」

「まあまあ、お姉ちゃん。三人から同時にキスされて、しかも顔中をベロベロ舐められたら、普通に正気で居られなくなるって。ここは、頑張ってくれた翔太君にご褒美をあげるべきだよ♥」

「ふんっ」

性の知識を欠片も持たない翔太こそ理想だったらしい七里は面白くない顔を浮かべている。だが、それも一瞬のこと。ズボンを突き破らんとするソレが見えれば、七里もすぐに理性を脱ぎ捨てるのだった。

三人で翔太のズボンやパンツを脱がす。解き放たれたペニスは、哀れなほど一途に直立していた。

下着に擦れたのか、とうに皮は剥けている。晒された亀頭は、真っ赤に燃え上っていた。

「小っちゃいチ○コ♪ ま、でも形は合格かな。それと臭いも……」

先走り汁をボタボタと滴らせている肉棒に、七理がうつとりした表情で手を伸ばす。二本の指で膨れ上がる亀頭を摘まむと、翔太は裏声を上げて悶えた。

「やああつ、や、やめつ、で、出ちやうつ、出ちやうつ……」

「ただ軽く触ってるだけだぞ。シヨウタってば、短小な上に早漏なのかよ。マジで可愛いんだけど。じゃあ、もう早くイツちやいなよ」

「あーん、翔太君のイキ顔視たあい!!」

「アタシも♪」

カ리를支える中指と、亀頭を押さえる親指で刺激を加える。上下に扱くよりも亀頭を中心に責めている。いまの翔太には抜群の効果であり、膝をガクガクと揺らして身体を支えるのがやつとのようなだ。快感に喘ぐ表情は羞恥に染まつており、瞳からは涙までも零れていた。

「これは……ヤツバいね」

「うん。マジでヤバい……」

翔太の泣き顔に気付くと、顔面を舐めていた沙八と蘭が動きを止める。べそをかく年下の姿に罪悪感を覚えた訳ではない。年上の集団に嬲られて、粘液だらけの満面を晒す哀れな翔太に、加虐心が炙れて止まないのだ。

「はああ、可愛いなあ。翔太君。もつとキスしてっ!! はむうっ!!」

「はあ、はあ、ん、ごくっ。っ、ツバ………んくっ、ごくっ」

「唾液の交換って、すっごく興奮するんだよ。ほら、ちゃんと飲んで♪」

「ごくっ、んくっ、んっ」

「私のも全部飲んでね。ほら、んくくくくっ」

「気持ち良いでしょ?」

「んっ、ごくっ、ごくっ。身体が熱くて、なにも考えられないです……」

七里が手コキに馳せる間も、沙人と蘭は翔太に唾液を流している。舌で翔太の口を強引に抉じ開けて、蘭と沙人が交互にキスを繰り返す。同時に唾液を送り込まれて何度も何度も喉の鳴る音が響いた。

唾液と接吻、そして手コキと様々な快楽を目の当たりにするが、翔太の意識は既に朦朧としており、押し寄せる快感の殆んどを理解できていない。微かに残る五感によって、翔太は唯々に性に溺れていた。

「あ、ああ、あっ」

「つたく、せっかく三人で奉仕してるのにマグロになってんじやねえっ」

「あ、あうううっ!?!」

「おら、もつと鳴けっ!!」

「……ツ!? ああ、ああああっ、お、おちん○ん扱かないでっ、出ちやう、出ちやうっ!! んあああっ、耳も、舐めないでっ、あ、あっ、頭っ、頭が溶けちやうっ!! んっ、んぐっ、んっ、ちゅっ!!」

手コキに加えてキスが続く。更に、蘭が無防備に晒されていた左耳へと舌を突っ込む。耳穴を舐められる初めての刺激に、翔太の身体がビクンと大きく跳ねた。

「びんかーん。翔太君の弱点発見っ♪ それじゃ、私も耳舐めてあげるね。んっ、ちゅっ、ぬちゅっ、どう? 両耳を扱られる快感は?」

「あああああっ、あああっ、ああああっ!! 両耳っ!! 舐めないでえっ!! ああああっ、溶けるっ、頭の中っ、掻き回されてえっ!!」

「へえ、シヨウタってば耳が弱いんだ? 蘭に舐められて膝が笑ってるよ。チ○コも、こんなにビクビクさせちやってさ。マジで気の毒だから、私がそろそろ抜いてやるよ。口でね!!」

「うああああああああああああああああああっ!!」

どふう、ぬぷっ、ドクツ、ドクツ、ドクツ!!

脳内麻薬が延々と噴き出す感覚に、翔太が声にもならない悲鳴を上げる。溜めに溜めた快感の堰を切り、翔太は七里へと灼熱の滾りを撃ち放った。

陰莖が七理の喉元で連続的に唸る。精液が絡み、七里は顔を顰めた。

「んっ、ちよっ、イクなら言つてよ。啞えた瞬間にイキやがって……」

「はあっ、はあっ、あああ、あっ、ああっ……」

「ま、まあいつか。臭いキツツ……すっげえ濃いのが」

まだ射精の感覚に慣れていない翔太は、震える脚を支えきれずに、糸が切れたように床へと転がった。電流を与えられたように、床に倒れこんだ翔太がビクツビクツとエビ反りを連続している。

「ううっ、うっ、はあ、はあ、はあ」

「うわあ、男でもこんなに気持ちよさそうに悶えたりするんだねえ」

「翔太君、気持ち良さそう♪」

「相当溜めてたんだね。いっぱい出てる♥」

「お姉ちゃん。翔太君の、どんな味？」

「んちゅ、ちゅぱっ、ガキの精子ってマジでヤバいわ。めっちゃ濃いのに、飲んでも全然不快感がない。それとも、シヨウタの精子だから美味しいのか。

あああ、口内射精されただけで私まで軽くイツちまった……」

「良いなあ。お姉ちゃん交代っ!! 私にも味わわせて」

「沙八ずるい! 私も翔太くんの味わいたいっ♪」

「ああっ、ちよっ、レズの癖につ……!!」

「待て。私も全然満足してないぞ。一分も経たずに終わったんだから!!」

「あうっ、はっ、も、もう、離して、くださいよおっ……」

「じゃあ、三人で舐める？」

「そうだね。いくら若くても、流石に何発も出せないだろうしね」

「けっつーい!!」

七里が精飲でオーガズムを味わい、二人もゴクリと喉を鳴らす。翔太の言葉など他所に、一本の肉棒を巡って三人が争奪戦を繰り広げる。結局は三人で仲良く分け合う和解に至った。

立ちっぱなしの翔太に三人が並び、一本の竿を目掛けて舌を伸ばす。

「んちゅっ、ちゅううっ、ちゅくっ、ちゅぱっ、んっ……」

「ぢゅるっ、んっ、トリプルフェラっ、初めてっ、面白いわあ……」

「んんっ、むちゅっ、んちゅ、ショウタ、こんなの初めてでしょ。どうよ、こうして、んちゅ、ちゅっ……三人から一斉にチ○コ舐められる気分は？唾液でおちん○んグツシヨグシヨだよ。こんなにねっとり舐められて……気持ちいいでしょ？んっ、ぺろっ、にちゅっ、んっ、深山由紀と別れてくれたら、いつだってこんな快感味わわせてあげられるよ？」

「うっ、あああああっ、あああああああっ!!」

射精の直後で感度が高まったペニスに、三つの粘っこい舌が絡みついて離れない。部屋には淫猥な粘液音ばかりが響いている。三方向から襲ってくる淫猥な刺激を理解するなど、性を知ったばかりの翔太には難儀である。翔太は只管に快感に喘ぎ、ビクビクと悶えるばかりで声も出せず、白目を剥いていた。

亀頭に皆木姉妹の舌が絡み、男根を蘭が捉えている。

「があああっ、こ、これっ、あああああああっ!!」

「あゝん、翔太君の喘ぎ声可愛い。んちゅっ、ぬちゅっ、ぬっ♪」

「んっ、くちゅっ、ぴちゅ、ちゅっ。ここまで感じてくれると、こっちも舐め甲斐があるね。貢献欲求って言うの？ 唯々シヨウタを幸せにしたいくなるわあ。んちゅるるっ、んっ♪」

「はむっ、んっ、ぬちゅっ。チ○ポの臭い大嫌いだったけど、翔太君のは全然イケるね。んちゅっ、ちゅくっ、私がつ、フェラで興奮するなんてっ、いまでも信じらんない。んはあ、あむっ……」

「ね、蘭。翔太君は亀頭が弱いみたい」

「ん、三人で♪」

舌が亀頭に集中し始める。尿道を七理に騁られて沙八と蘭からはカリを前後より擦られる。三人の呼吸が次第に重なり始めると、刺激にリズムが加えられていき、翔太でも理解できる官能へと昇華していった。

蕩ける甘い三本に、ペニスまで融解しそうな勢いだ。

「くちゅっ、ちゅっ、れるっ、れるれるるっ……んはあ……シヨウタの我慢汁しよっぱくて美味しい。尿道にいっぱいツバ入れてあげるから……シヨウタも私の唾液たっぷり味わってよね」

「あああっ、ひっ、くうう……がああっ、はっ、か、かああっ！」

「お姉ちゃん、んっ、ちゅくっ、そこ代わってよ。私まだ翔太君の我慢汁、全然飲んでないんだからさ。んちゅっ、ちゅううっ」

「でも、翔太君ってカリが凄い敏感なんだね。ほら、カリに軽くキスするだけなのに、ちゅっ、こんなに全身がピクピクしてるよ？」

「くあっ、ああっ、あああっ、み、みなさんの舌が、僕の、に、絡んで、ひっ、あ、ああっ、ま、また出ちやう、で、出ちやうっ!!」

翔太が全身から汗を噴き出す。耐えられぬ快感が翔太に危険信号を発し、それが発汗という状態で表現されているのだ。そんな反応を愉しみつつも、三人衆の動きは止まらない。

「チ○コ、みんなの涎でベトベト……臭いもスゴすぎるんですけど」
「んっ、ちゅくっ、んっ……私は、この臭い、エロくて好きだわ。沙人と、七理姉さんと翔太君の粘液が混じり合って……めっちや臭くて、めっちや興奮する……ぺろっ、んっ、れろれろっ!!」

「蘭……そういうの口にしないで良いから。んちゅっ、ちゅっ……」
「それより、さつきよりチ○コ大きくなってんね。ちゅっ、にちゅっ……すっごいガチガチでっ、んっ、はあっ、シヨウタ、またイキそう?」

「……っ!？」

「もう二発目とか、やっぱり若いなあ。ぬちゅっ、れろっ……それじゃあ、気絶しちゃうくらい気持ち良くしてあげるっ!!」

「あああああっ、で、出ちやううっ!!」

目を瞑り、翔太が何度も頷く。佳境に入ったことを受けて三人が速度を高めていく。飽くまで集中砲火の対象は亀頭のみである。特に理由もなく、なんとなくの一点責めだったが、射精直後に敏感なカリを刺激され続けた翔太は苦しいまでに官能を高めてしまい、絶頂と共に放ったソレは、精液以外の液体まで噴射させるに至っていた。

「はあああっ、ああっ、うっ、あああああああああっ!!」

プシユウウウツ、ビュルルツ、ブシユウウウツ!!

透き通るように美しい聖水が三人の顔面に降りかかる。突然の出来事に驚いたような声を上げるも束の間、その液体の正体を認識すると、三人は歓喜の声を上げた。

精液と一緒に放たれるは、透明色の鮮やかな麗水だった。

「ひゃああつ!! わぷっ、な、なにが起きたのっ!!」

「えっ、なにこれ!? もしかして潮!? マジで、嘘でしょ? ショウタク、

どんだけ気持ち良かったのさ。あはははははっ」

「えく、すごっ。男の潮噴きって初めて見たっ!!」

「というか、男に潮噴きがあつたんだね……初めて知ったわ」

「あつたかくて、綺麗っ。んっ、味も悪くないみたい」

「臭くないし、なんだか興奮してきちやう……」

「はあ、はあ、はあっ、あうう、も、もう動けないです……」

翔太の潮噴きに三者三葉である。かくいう翔太は、憔悴しきった様子で魚のようにピチピチと身体を跳ねらせていた。

連続射精の上に潮まで噴き出し、流石の翔太も出し切ったように男根を萎えさせる。が、それで納得する三人ではなかった。

「あーもう、シヨウタってば可愛すぎ!!　こんなに潮出しちゃって、わんわん泣いちゃってさ。私のここ、どうしてくれんのさ!」

床に屈する翔太を七里が見下す。潮を全身に浴びたことで七里の陶然に拍車が掛かったようだ。秘部を広げて翔太に陰唇の煌めきをアピールする。官能に燻された局部は、焼きついたように熱い淫液に炙られてギラギラと艶めいていた。

「この感覚ヤバイ。子宮疼きまくって爆発しそう。これ、ちよつと弄っただけで絶対に潮噴ける。マジで興奮してヤバいんだけど。シヨウタお願い。私のココ、思いつき舐めてっ!!」

「えっ、も、もう終わりじゃあ……」

「なに言ってるの!?　自分だけ気持ち良くなれば、それで良いっての?　ふざけないでよ。今度はシヨウタが私らを気持ち良くする番なんだよ。あ、その後はセックスだから」

「ごめんね、翔太君。辛いと思うけど、私のオマ○コも疼いてるの♪」

「ん、少なくとも、あと三回は射精してもらおうと思う」

「そ、そんな……」

「おら、無駄口叩いてないで早く私の舐めてっ!!」



「わっ、んぷっ、んんんんんっ!!」

「あんっ、シヨウタのっ、シヨウタの唇がああっ!!」

「んぐうううっ、んんんっ、んっ、んぷうっ!!」

「ああああんっ、キスされてるっ、シヨウタが私のマ○コにキスしてる!!
し、幸せえっ!! あああん、息がっ、唇がっ、んんんんんっ!!」

是非もなし。待たずして七理は仰向けする翔太の顔面に騎乗した。

自らの指でクリトリスを撫で上げ、陰唇からドロツと濡れた愛の粘液が溢れ出す。頭一つ動かせぬ翔太がモロに愛液を被る。顔面を濡らして口の中に注ぎ、それが更に七里を燃え上がらせていた。

限界を超えた情欲が七理を猥雑に荒狂い、陰唇より断続的に快樂腺液が滲出する。翔太の口に肉ツボを重ねると、七理は瞼から一筋の涙を零して喜悦の叫びを謳った。

「ひああああっ、イクツ、イクツ、イツちやうううっ!! シヨウタの舌が私のマ○コに触れてっ!! これギモチイイ……あっ、と、止まらないっ!!
はあっ、あっ、ああっ、ああくあああああああっ!!」

「わぷっ、んっ、んくっ、んっ……」

「シヨウタがっ、私の飲んでるっ、あああっ、ヤバいいいっ!!」

堰を切った七理が絶頂を連続する。尋常ではない量の愛液が放出すると、陰唇に重なる翔太の顔面を満遍なく濡れしていく。律儀に全て喉へと通す翔太が愛おしく、七里は尿交じりの潮まで噴出した。

熱い間欠泉が翔太の全身を満遍なく穢す。この凌辱感も堪らなかつた。

「んっ、んんんんっ!!」

「ああああっ、はあっ、あっ、はあっ……シヨウタっ、大好きっ!!」

「んはあっ、あっ……んっ、ごくっ、ごくっ、ううっ、皆木さんの愛情が伝わってきます。お、お、オマンコから……お汁、あっ、どんどん溢れて、く、苦しいくらいにっ!!」

「はあ、はあ……いまさら皆木さんはないでしょ。七理って呼んでよ」

「な、七里、さんっ!!」

「んっ、あああああっ、シヨウタに名前と呼ばれたっ!! こ、これだけでイツちやいそうっ!! ああああっ、んっ、これ、ヤバっ……シヨウタの舌めちやくちや温かいっ!! あっ……はっ、はっ、はっ!! ま、またあっ、これ以上イツたらっ、や、ヤバいってマジでっ!! んっ、で、でも……い、良いよっ、も、もつと、強く舐めてっ!! もつと舐めてっ!! 私を、あっ、んっ、犯してえええっ、んっはああああん!!」

翔太に騎乗するだけで幾度と絶頂に達した七理である。官能色が全開な状態で舐められれば、七理の潮噴きも止まらなくなる。眼光を色落として、顔面を蕩かせて喘ぐ様子は、まさに恐悦に依存した淫獣だった。

そんな快楽に富む姉に、感化された沙人が翔太の股座を陣取る。

「良いなあ。ねえ、私も頂いちやって良いよね？ 見ていたら、うずうず止まらなくなっちゃった。ねえ、お姉ちゃん。先に貰って良いよね？」

「え、妹に先越されるとかヤなんだけど!! てか、もう挿入れてんじやん。うううう!! ぶっ飛ばしたいけど、こ、ここから動けないっ……ああ、シヨウタツ、もっと舐めてえええっ!!」

「おおきに、お姉ちゃん。んっ、ああっ、い、行くよ……翔太君っ♪」

七里や翔太の了解を待たず、沙人が騎乗位の体勢を取る。七里も翔太も動けず、沙人の好いようにペニスを扱う。水を得た魚のように滾る翔太のイチモツを手にする、そのまま沙人は矛を吸い込ませていった。

「んっ、ああああああっ、な、なにっ、すごい、これえっ!!」

強制的に根元まで突き刺さる。挿入して間もなく、隘路がキュツと引き締まって淫壁から愛の汁が流れ出す。女を惑わす翔太の魔力と言って良い、凄まじい快感が沙人の全身を駆け巡った。





沙八の目がカツと見開く。ギチギチに歯を食いしばり、こんな表情など見たこと無いと蘭が驚いている。まるで魔法に中てられたような信じ難い快楽には沙八もきりきり舞い。「少しでも動くといッちやうかも……」と、微動するのも躊躇われる程に、相対する快楽へと毛を逆立てた。

言わば危険信号である。女を虜にする翔太の力が働き、それを感知した沙八の防衛機制が働いている。翔太の短小では沙八の奥底まで到達しない。しかし、Gスポットの肉洞にフィットする丁度のサイズだった。

「なにしてんの沙八。動けないの？ 私が手伝ってあげるよ」

「ちよっ……うきやあああつ!! ああああつ、ちよっ、や、やめっ、蘭っ、ひやあああああつ!! ああつ、ああつ……ら、蘭んんっ!!」

空気を読まない蘭が翔太の腹に乗っかり、硬直状態の沙八に抱き着いて腰を揺らし出る。微動だに出来ぬ所を、無理やりに動かされてしまい……Gスポットを抉られ、沙八は飛び跳ねるようにアクメに陥った。

「ど、どうしたの、沙八。大丈夫!?」

「こ、この野郎……だ、大丈夫、じゃないに決まってるじゃん。翔太君の、気持ち良すぎてっ、小っちやいののに、Gスポ抉れて奥まで響いてきて……はああ、はあっ……」

いつも凜然とした沙八の、なんとも情けないアへ顔が晒される。連続でオーガズムに達したことから、姉同様に理性がボロボロと剥がれてしまい、天を仰いで涙を流すのだった。

「沙八っ、な、なんでそんなに感じてるのっ!! そんな見っともない顔をしちやってさ。七理さんも顔騎しただけで潮噴いちやうし、そんなに感度良かったっけ? それとも、翔太君がスゴすぎるって言うの?」

「はあっ、はあっ、はあっ……翔太君のチ○ポ……中でビクビク脈打って、んあっ、あんっ、こ、これ、気持ち良いのお。ら、蘭も次に味わってみて。熱く蕩けた感触が堪らないからあっ!!」

「あああっ、シヨウタっ、沙八のに気を取られて舌が止まってるっ。私の、オマ○コも、ちゃんと相手にしてよね。ほら、も、もつと、舐めてよおっ、ああああっ、それっ、良いっ、シヨウタアツ!!」

うねりをあげる沙八の尿道から、プシヤツ、シヤアアツと断続的に潮が飛沫する。潮は股座にいた翔太と、沙八を正面からハグする蘭に容赦なく降り掛かっていた。

同じく七里も潮を降らす。膀胱一杯の尿が漏れたように、翔太の口から溢れた潮が床に零れて水溜まりを作ってしまう。

人間にはマーキングで興奮する本能がある。愛しい相手に自らの体液を塗り付ける行為は支配欲を擽るといふ。股座の翔太へと大量の潮やら愛液、尿まで浴びせる皆木姉妹は、心のオーガズムにも溺れていた。

「ひええ、翔太、君っ……もつと、べとべとにしてあげたい……私の体液、全て受け止めてっ、あああつ、ひあつ、翔太君を私色に染めてあげるから、んんんっ、背徳感っ、凄い。あああ、また出ちやうううっ!!」

「シヨウタツ、シヨウタアツ、シヨウタが私の潮っ、全部飲んでくれてる。最高の奴隷だっ、あああ、好きっ、大好き、シヨウタツ……一生ペットにしたいっ、ずっとずっと一緒にっ!! あああああつ!!」

「もうっ、義姉さんはともかく沙八までっ。一番は私でしょ!? 翔太君のこと、私も好きになれそうだけど、私のことを一番に視てくれないと許さないからっ!!」

「んはああつ、ああつ、あああつ!! やっ、蘭っ、乳首っ、そんなに強く摘ままないでっ!! いま、感度ヤバいのおおおっ、あああああつ、出る、出る出る出るっ、出ちやううううっ!!」

「あああああああああああああああああああつ!!」
皆木姉妹の絶叫が轟いた。

(ああ……シヨウタ、潮なんて飲まなくていいのに。汗だくになりながら、一生懸命に私の潮を飲んでくれてるなんて幸せ。可愛い。好き。シヨウタ、大好きだっ!!)

「はあ、はあ、ああん、翔太君のちん○んと私のオマンコ、こんなにも相性良いなんて思わなかったや。ちよい物足りないサイズかと思っただけど、Gスポットに直通だし癖になっちゃう♥」

「二人とも良いなあ、すごく気持ちよさそう。翔太君、沙八が終わったら、今度は私が相手だよ。男は嫌いだけど、翔太君だけ例外にしちゃう♪」

ダンマリしていた蘭が口を開く。中性的な容姿の翔太に当てられたのか、生粋のレズだと自認していた蘭も、翔太に胸をトキめかせている。肉壺を晒して自ら慰みに掛かり、蘭も翔太へとマーキングを始めた。

「はあ、はあ、はあっ、翔太君と沙八と義姉さんに囲まれて……私こそが幸せだよ。見てよ、沙八。こんなに愛液が溢れちゃってる……はあ、はあ、はあ……翔太君、私の体液も存分に味わってねっ♥」

「あーん、凄いい。翔太君、三人の愛を同時に受け止められるかな？」

「んちゅっ、ごくっ、ごくっ、愛を受け止めるって言われても……ぼ、僕、どうしたら良いか、ぜ、全然分かんないです、んっ、ちゅっ……」

「シヨウタは、黙って私の愛を受け止めてくれれば良いんだよ」

「でも、僕は由紀さんが……」

「深山由紀が好きなんですしよ。何度も言わなくても分かっているっのっ!! 別に、もう和解とか奴隷とか良いから。ただ、私はシヨウタに拒絶だけはされたくないの。お願いだから、私のこと嫌わないでほしい」

「……き、嫌いじゃ、ないです。拒絶なんて出来ないです……」

「……ありがと。シヨウタ」

「ふわ、お姉ちゃんツンデレみたい」

「本当に好きなんだね、義姉さん。翔太君のこと」

俯く翔太に、愛を止められない七理。感極まってることもあり、七里の本音がボロボロと零れている。このやり取りには、沙八や蘭も呆気に取られるばかりだった。

「こんな（キモい）お姉ちゃん、初めて見た気がする。翔太君って本当にモテるんだねえ。お姉ちゃんを此処まで虜にさせるなんてさ」

「沙八、うるさい。あと、シヨウタはモテるなんてもんじゃない。マジで呪いにかかっているんじゃないかかってくらい、ここらの女共に愛されてさ。ホント、エロ漫画かよって感じでムカつくんだよ」

「へえ〜」

「でも、翔太君に呪いが掛かってるのは領けるかも。いままでセックスでこんなに感じたの初めてだもん。出会って間もないのにさ、翔太君に惹かれっぱなしだよ♥」

「妹なんかに、シヨウタは絶対に渡さないから」

「ふふっ」

「はは」

姉妹が笑い合う。こうして一人の男子を取り合う争いが楽しいと言った様子だ。ふっと笑みを残して再び二人が動き出す。沙人は騎乗位で肉棒を絡め捕り、七里は顔面騎乗から愛を放出する。板挟みの蘭は、陰唇を擦りながら、自らクリトリスを弄っていた。

「うっ、あっ、はっ、はっ、うあああっ!!」

「あっ、翔太君の大きくなったっ」

「もうイクみたいだな」

「あ〜んっ、翔太君のイキ顔を見たいっ、お姉ちゃん、そこ退いて？」

「や、やだよっ、シヨウタと一緒にイキたいんだから……」

「ん、もう。じゃあ、このまま四人同時にイツちゃおう♪」

沙八の胎動に翔太も快樂の声を漏らす。腰が弓なりに撓り上がり、間もなく絶頂することを全員が予感する。沙八がグライインドからピストンへと移り、七里も両手で乳房・陰核を慰め始めた。

「ふああああ、翔太君の物凄く硬い。オマンコの中で、どんどん膨らんでくるのが分かるよおっ……うん、そのままっ、中に出しちやってえっ……はあ、はあ、はあっ、くうううっ!!」

「シヨウタツ、気持ち良いのは分かるけどっ、舌の動きっ、止めないでっ、あんっ、あっ、私も、一緒にイキたいからあっ!! はあ、はあ、はあ……シヨウタの口の中につ、ありったけの愛液っ、ぶちまけてあげるっ!!」

「ああんっ、みんな、凄いつ!! わ、私もっ、んっ、あああっ!!」

「皆さんの身体、す、凄くっ、熱いですっ、んっ、で、出る、んんっ!!」

「ああああ、シヨウタツ、イクッ、イクッ、イクウウッ!!」

「翔太君っ、キテっ、中に……熱いの出してえええっ!!」

「はあああっ、私もイクウウッ!!」

ドクッ、ドクッ、ドクッ……ドプウッ……

最後に全員の絶叫が轟いた。真夏という季節の中で汗だくになりながら、四人は最後の一滴までエクスタシーの血潮を打ち放つのだった。

「ひいいん、ああっ、しよ、翔太君の精液っ、あつ、あああつ、熱いっ!!
熱い精液っ、子宮に注がれてっ、ああっ、あああつ、気持ちいいっ、あつ、
だめっ、また出ちやうううっ!!」

「沙八のイキ顔っ、可愛いっ!! わ、私も、イクっ、んっ、お願い沙八っ、
キスしてっ、イキたいからっ!! んっ、んんっ、んちゅっ、で、出るっ、
んっ、んんんんんっ!!」

弾けるように、沙八の膣内で陰茎がドクドクと胎動を度重ねる。同時に
絶頂した沙八も、肉壺の中にて愛の洪水を巻き起こす。尿道から透明液を
乱発して翔太を燻した。

同時に、蘭もクリトリスの自慰により果てる。更に、沙八とキスにより
多幸福感を極めると、蘭は幸せのあまりに全身を脱力させて、愛液とは別の
黄色く濁った液体も排泄した。

「はあっ、はああつ、あつ、ら、蘭っ。イク度におしっこ出すの勘弁して
よっ……はあつ、あつ、この辺、超臭いじゃん……」

「ご、ごめん。しよ、翔太君も、ごめんねっ……あつ、あつ♥」

「はあ、はあ、はあ、寧ろ、シヨウタは悦んでるっぽいかな」

「ふふっ、変態さんなんだから♥」

自分より遥かに年下の少年に対して、あらゆる液体をぶちまける行為が背徳の蜜となり、蘭を恍惚状態へと陥らせていた。

天を見上げては、蘭が局部を疼かせて放心する。

「はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあっ、はあっ。ヤ、ヤバッ。膝、震えてっ……」

「ちよっ!？」

「きやあっ!!」

大海原の極地により、体力を使い果たした七理が膝から崩れそうになる。それを支える蘭だったが、自身も消耗していたことからバランスを崩して沙八へと凭れ掛かった。

そして、ドミノ倒しに三人が翔太へと倒れこむ。

「いたたたっ、シヨウタ、大丈夫？」

「あ、は、はい……」

三人の肉布団に埋もれる翔太が人妻の肉感に頬を染める。今更ながらに、そんなことで恥ずかしがる翔太が愛おしくて堪らないと、七理が胸を疼かせる。体液塗れもお構いなしに、七里が愛の言葉を囁きながら、翔太へとキスをした。

「シヨウタ、大好き♥」

「あ、ありがとうございます。ぼ、僕も七理さんのこと、その、えつと」

「別に、無理に好きなんて言わなくていいよ。ただ、私がシヨウタの傍に居ただけだから。まあ、いつかは深山由紀より好きになってもらうけど。いまは、片思いでも良い。片思いでも幸せだから……ちゅっ♥」

「……ごめんなさい」

「良いってば。それでこそ奪い甲斐があるから……」

「奪い合う必要なんて無くない？　ねえ、翔太君……一応言っておくけど、この世には別に一人しか好きになっちゃいけないってルールは無いからね。お姉ちゃんのこと、深山って人と一緒に愛しちやって構わないんだよ？　私のこともね♪」

「え、えええっ!？」

「沙八。余計なことは言わなくて良いから。いまは、これで良いんだよ」

「あつそ。じゃあ、お姉ちゃんはソレで良いよ。でも私は今すぐ翔太君に愛されたいからさ。翔太君、私のことを愛人にしてくれない？」

「沙八っ!!　あんた、もう帰るんだから関係ないでしょ!!」

「まさか、沙八……」

「うん。私、こっちに引っ越すって決めた」

「本気で来ようとすんなよ!! いや、マジでお願いしますから」

「引っ越し先を考えてたし、丁度いいじゃん。蘭は、どう？」

「私は、沙人に一生ついていくって決めたから……」

「決まり。ね、翔太君。いいでしょ？」

「あ、その……えっと。でも、今日会った人を、いきなり好きなるなんて、いくらなんでも出来ませんよ……」

「えー、私お姉ちゃんより頭も顔も良いし胸だつてあるよ？ あと、唇の柔らかさが自慢かな。ほら、んくくくつ、ちゅうううつ!!」

「ひ、ひあああ……」

沙八が七理を跳ね除けて翔太の唇を奪う。七理は内心で実妹たる沙八に恐れを抱いており、それはお互いに嫌ほど理解している。引っ越しという名の沙八の進行を阻む者など、七理を始め最初から誰一人として存在しておらず、七里は強く頭を抱えるだけだった。

「ま、そのうち好きになつてくれれば良いや。とりあえず、言えることは、こっちに引っ越すってこと。これからよろしくね、翔太君っ♪」

「は、はい。よ、よろしくお願いします……」

「はあ……旦那持ちの癖に。蘭っっていう恋人も抱えて、その上シヨウタを愛人にしようとか、我が妹ながら凶太すぎ!!」

「やりたいことを好きにやるのが私なの」

そう言い、沙八が今度は蘭にキスをする。沙八にゾツコンな蘭は、頬を染めて目をハートマークにする。七理は、もう一度大きなため息を吐くのだった。

「あ、あの……沙八さん。これからよろしくね、というのは、これからも、その、こういうことをするってことなんででしょうか？」

「勿論。イヤとは言わせないよ。だって射精したばかりなのに、翔太君のおちん○ん、こくんなに元気なんだしさ。絶倫の才能があるよ♪ スマホ持つてるなら、番号を渡しておくよ。エッチがしたくなったら、いつでも私を呼んでね♥」

「ああもう……めちゃくちやだよ」

横暴な沙八に、七理はガツクリと項垂れていた。

とは言え、由紀や沙八の活躍により、翔太が多少なりとも性的に寛大になつたのは七里にとっても喜ばしい。このまま翔太と距離を縮められれば、或いは……と、考えるだけでイキそうだった。

「お姉ちゃん。交代する？」

「えっ？」

「なんか凄いエッチな顔してたよ。翔太君も元気だし、次やる？」

「あ、や、やるやるやるやる!! ショウタ、良い？」

「う……………はい」

「あああ、ショウタツ、可愛い。大好きっ♡」

「あ、あうう……………」

「あ、あの翔太君。最後には、私も良いかな？」

「はい……………」

「おおー、蘭が異性とエッチするなんて……………」

「翔太君が相手なら♡」

「モテモテだね、翔太君。ちゃんと、全員の愛を受け止められるかな♪」

「会話は後っ。退いて、沙八っ!!」

三人の体液でびしゃびしゃのドロドロな翔太。相当に疲弊していて肩で呼吸を繰り返している。七里の女汁で窒息し掛けては、連続で射精したのだから当然と言えるだろう。だが、それでも一部分のみ、恐れを知らずに未だ漲った様子を見せていた。

今度は、七里も目をハートマークにする。沙人が退くと、天井に伸びる翔太の逸物が露わとなる。真つ赤な亀頭から我慢汁が噴き出して、それはまるで七里との行為を歓迎しているようだ。

ゾクリと子宮を疼かせる。口内は涎で一杯だ。愛する者との行為を前に、七里の多幸福感が溢れて止まない。最後に一度だけ唾を飲み込むと、七里は翔太の肉棒を啜え込むのだった。